

イロナシハナイロ ～未蕾（みらい）～

未
蕾
（
み
ら
い
）

登場人物

キキトリ	・	未来を聞く少女
イロドリ	・	家族と生きるキキトリ
ヒトリ	・	孤独に生きるキキトリ
ウケトリ	・	今を生きるキキトリ
未来の私たち	・	
放送局	・	

POPな音楽。

ラジオ番組、ナナイロミライのスタート。

放送局登場。

放送局 「どうもこんばんは！

レインボーフューチャー、ナナイロミライのお時間です。

今日もリスナーの君に素敵な未来からのメッセージがたくさん届いているよ。
未来の出来事を今から知って、自分の未来をハッピーに生きていこう！ も
ちろん、この放送を信じるか、信じないかは君次第だけど。

未来を信じすぎちゃいけないって話さ。どんな未来がやってくるかは、誰にも
わかりやあしないんだからな。な・ん・で、いつも言ってるように、リスニン
グは慎重に、話半分に聞いてくれ。じゃあ、行こうか、今日の未来のメッセー
ジは——」

キキトリ登場、手にはラジオを持っている。

どうやら放送局の声はそのラジオから聞こえている様子である。

キキトリ、ラジオを置いて放送を聞く。

ウケトリ登場。

ウケトリ 「未来というものは一体どこにあるのでしょうか。

ここにいる私が『今』だとして、未来というのはいつぐらいのことを指すのか。

明日？ 明後日？ 来月・・・来年？ それとも、もっともっと遠い先の時間
のことなのでしょう？

イロドリ、ヒトリ登場。

手紙を手にしており、それを読み上げる格好。

イロドリ 「昔の私へ。

今年も家の前の池に蓮の葉が広がりました。薔も大きくなってきています。夏休
みになったらピンクの大きな花が咲くでしょう。

（少し寂し気に）今度の夏休みは中学生最後の夏休みです。受験勉強は大変だけ
ど、頑張ってます！ 頑張ってるよ！ 私！」

ヒトリ 「昔の私へ。

志望校、受かったよ！ これで、ともちゃんたちとまた一緒にいられる！（や
や恥ずかしがりながら）・・・それと、田中君とも」

キキトリ「ナナイロミライというラジオ番組。

小さな時から聞いているその番組はなぜかこのラジオからしか聞けなくて、そして、ナナイロミライに投稿されるメッセージは未来の私からのメッセージだった」

ヒトリ「昔の私へ。

聞いて！ 田中君と付き合うことになりました！ 中学の時から好きだって伝えたら、田中君も私のことが好きだったんだって！ 思い切って告白してよかった！」

キキトリ「どういう理屈で未来の私が私にメッセージを残しているのかはわからないけれど、でも、メッセージで語られる出来事はいずれ今の私にやってくる」

イロドリ「昔の私へ。

知ってる？ 田中君で背中の中真ん中にほくろあるんだよ？ なんてそんなこと知ってるのかって？ （恥ずかしそうに）秘密です。そのうちわかるよ！」

キキトリ「私の知らない未来の私は、いつも楽しそうで、小さかった頃は少し怖いな、って思ったけれど、だんだん気にならなくなっていった。

だって、私には未来がわかる。それは他の子たちとは違った特別なことなんだって思うようになって、私は嬉しかった」

ヒトリ「昔の私へ。

また受験です。大学受験は高校受験と段違いで、最近勉強ばかりで田中君と会えてません。寂しいけれどしょうがないよね。そして残念な報告。田中君は大学にはいかないんだって。高校出たら働くんだって。これも、しょうがないよね」

キキトリ「時には悲しいメッセージも届く。小さい時はそれが嫌だった。怖かったから。でも、成長するにつれて、気にならなくなってきた。だって、仕方ない。いつだって楽しいことが続くわけじゃないんだし。そりゃあ、続けばいいとは思うけど。・・・でも、ふと思う。私は未来のメッセージを受け取るばかりで、私の過去にメッセージを送ったことはない。私はいつ、昔の私にメッセージを送るのだろうか？」

キキトリ、自宅へ帰宅。

ウケトリ、母となる。

キキトリ「ただいま」

ウケトリ「はい、おかえり」

キキトリ「（家に漂う匂いに）ん？ 揚げ物？ お母さん、またとんかつ？ 先週も作ってたじゃん」

ウケトリ「なに？ 食べないの？ お母さんのとんかつ好きでしょ？」

キキトリ「・・・食べるけど。太っちゃうよ」

ウケトリ「あのね、これは縁起もののなの。勝負に勝つには活を入れる。だからカツを食べる。

あと、あんた痩せすぎよ。ちょっとぐらい太ったってねえ——」

キキトリ「（遮って）わかった！ 食べる！ 食べるから。あ、着替えてきちゃうね」

ウケトリ「そういえば、咲いてた？」

キキトリ「え？」

ウケトリ「蓮」

キキトリ「ああ、咲きそうだったよ。もうすぐ、夏休みだもんね」

キキトリ、部屋に移動。

鞆を置く仕草。

ふと、テーブルの上のラジオに手を伸ばす。

POPな音楽。

ラジオ番組、ナナイロミライのスタート。

放送局登場。

放送局 「どうもこんばんは！

レインボーフューチャー、ナナイロミライのお時間です。

今日もリスナーの君に素敵な未来からのメッセージがたくさん届いているよ。

未来の出来事を今から知って、自分の未来をハッピーに生きていこう！ も

ちろん、この放送を信じるか、信じないかは君次第だけど」

以下、未来のキキトリ達のメッセージにリアクションするキキトリ。

※交互に喋っているが会話ではない。

イロドリ「昔の私へ。祝！ 大学合格！」

キキトリ「やった！」

イロドリ「私、偉いぞ！ よく頑張った！」

キキトリ「よかったあ」

イロドリ「大変だったんだから。あ、でも今まさに大変なのかな？」

キキトリ「大変ですよお」

イロドリ「お母さんのとんかつのおかげかも。あ、残念ながらしつかり太りました・・・」

キキトリ「ああ、やっぱり・・・」

キキトリ、ウケトリ（母）に向かって、

キキトリ「お母さん！ やっぱり私だけ違うの食べる！」

ノイズの音。

キキトリ、驚く。

キキトリ「え？」

放送局 「どうもこんばんは！

レインボーフューチャー、ナナイロミライのお時間です。

今日もリスナーの君に素敵な未来からのメッセージがたくさん届いているよ！」

ヒトリ 「昔の私へ。

残念ながら、第一志望は落ちちゃいました」

キキトリ「え？ だって、さっき・・・」

ヒトリ 「やっぱりとんかつ食べておけばよかったかな。そんなの関係ないか」

キキトリ「・・・」

ヒトリ 「努力不足です。ごめんね」

キキトリ、ヒトリの言葉に何か思う。

キキトリ 「お母さん！ やっぱりとんかつ食べる！」

キキトリ、一人語りへ。

キキトリ 「夕飯のメニューで未来が変わるなんてばかかしかったけど、でも、私は怖かった。あの時、怖いと感じたんだ。だから、太るのは嫌だったけど、お母さんのとんかつを食べた。私の言う通り太っちゃったけど、第一志望の大学には受かった。

でも、あの日から、ナナイロミライを通して届く、未来の私のメッセージは・・・」

ノイズの音。

ヒトリ、恨めし気な雰囲気でキキトリをにらみつけている。

キキトリ、ヒトリの空気を感じ取る。

ヒトリ、ぼつりと。

ヒトリ 「どうして私を選んでくれなかったの？」

キキトリ「・・・だって、失敗はしたくないもの」

ヒトリ 「じゃあ、私はどうしたらいいの？」

キキトリ「そんなの知らない」

ヒトリ「私を置き去りにして、私はどこにいくの？」

キキトリ「知らない。私はあなたじゃない」

ヒトリ「そんなのってずるいと思う」

キキトリ「うるさい」

ヒトリ「あなたなのに。私はあなただったのに」

キキトリ「違う。私はあなたじゃない。あなたは――」

イロドリ登場。

晴れやかな笑顔と雰囲気である。

イロドリ、キキトリに馴れ馴れしい。

イロドリ「選ばなかった私なんて、どうでもいいじゃん！ あなたは私を選んでくれた！

それは正しいことだよ。間違はなく大正解だね！ これで私の未来は安泰安心。

なんにも心配することなんかない！」

キキトリ「（ヒトリの言葉を気にして）・・・うん」

イロドリ「え？ 何？ 失敗した私のことなんか気にしてんの？ そんなのどうでもいい

じゃん！ 私を選んで成功した私は失敗のことなんか気に掛ける必要なんか

ない！」

ヒトリ「私はずっとここにいるよ」

イロドリ「ここってどこ？」

ヒトリ「私はずっとここにいる」

イロドリ「あなたの居場所なんてどこにもない」

ヒトリ「いいえ、私は私だから」

イロドリ「いいえ、私が私なのよ」

ヒトリ「いつか私は私を選ぶ」

イロドリ「そんなことありません！ だって、私は私を選んだんだから！」

ヒトリ「あなたが私になるまで、諦めないから」

イロドリ、ヒトリ、手紙を取り出す。

イロドリヒトリ「昔の私へ」

放送局「どうもこんばんは！ レインボーフューチャー、ナナイロミライのお時間です！」

ヒトリ「田中君と別れました」

イロドリ「田中君にプロポーズされました」

ヒトリ「原因は私の浮気です」

イロドリ「ずっと一緒にいてほしいって言われました」

ヒトリ「田中君は仕事で忙しいってそればかりで」

イロドリ「高校の時みたいに毎日会えるわけじゃないけど田中君は私を大切にしてくれた」
ヒトリ「別に未練なんかありません。新しい彼氏なんてすぐにできます。もっと遊びたいの、私は！」

イロドリ「大学卒業と同時に結婚かあ。早すぎる気もするけど、まあ、幸せならいいよね！」

ヒトリ「いい男なんてどこにもいやしません。私は一人で生きていくのかもしれない」

イロドリ「お母さんとかになるのかな？ でもそれもちょっと早すぎる気がするなあ」

ヒトリ「子供なんて嫌いです」

イロドリ「名前はなにしようか？」

ヒトリ「私は私の未来にさえ名前を付けることができない」

イロドリ「『みらい』っていう名前は、ちょっと気取りすぎかな」

ヒトリ「未来なんて来ないんだと思います。そもそも、『未だ来ない』のが未来なら、やっぱり私には何もないんだ」

イロドリ「あなたが私を選んでくれたから、」

ヒトリ「あなたが私を選ばなかったから、」

イロドリ「今の私はここにいます」

イロドリ「早く私になってね！」

ヒトリ「いづれ私に、なればいい」

放送局「信じるか信じないかは、君次第」

キキトリ、ラジオの前で立ち尽くしている。

キキトリ「未来は増えていった。私は浮気なんかしないで、田中君と付き合い続けた、そして結婚して子供を産んだ。名前は『未来』と名付けた。未来は育って、今年、受験を迎える」

ウケトリ、キキトリの子供になる。

ウケトリ「ただいま」

キキトリ「はい、おかえり」

ウケトリ「（家に漂う匂いに）ん？ 揚げ物？ お母さん、またとんかつ？ 先週も作ってたじゃん」

キキトリ「なに？ 食べないの？ お母さんのとんかつ好きでしょ？」

ウケトリ「・・・食べるけど。太っちゃうよ」

キキトリ「あのね、これは縁起ものなの。勝負に勝つには活を入れる。だからカツを食べる。」

あと、あんた痩せすぎよ。ちょっとぐらい太ったってねえ――」

ウケトリ「（遮って）わかった！ 食べる！ 食べるから。あ、着替えてきちゃうね」

キキトリ「そういえば、咲いてた？」

ウケトリ「え？」

キキトリ「蓮」

ウケトリ「ああ、咲きそうだったよ。もうすぐ、夏休みだもんね」

ウケトリ、去ろうとする。

と、

キキトリ「ねえ、未来」

ウケトリ「何？ お母さん」

キキトリ「あなたは、私の未来よね？」

ウケトリ「何言っているのかわからないという顔をしてから、冗談交じりで」なに？ 私、

本当の子供じゃないの？」

キキトリ「何言ってるの。私が産んだの・・・何でもない、気にしないで」

ウケトリ「変なの」

ウケトリ、去る。

キキトリ、ラジオの電源を付ける。

放送局 「どうもこんばんは！ レインボーフューチャー、ナナイロミライのお時間です！」

イロドリ「昔の私へ。私を選んでくれて、ありがとうね！ 私のおかげで、私は楽しく過ご

せています・・・けどね」

キキトリ「（イロドリの言葉に耳を澄ませる）・・・」

イロドリ「なかなか人生うまくいかないんだなあ」

キキトリ「・・・え？」

イロドリ「（キキトリを見て）きつと聞かない方がいいと思う」

キキトリ「どうして？」

イロドリ「いろいろあるの。未来には」

キキトリ「私はあなたを選び続けて、あなたになるための未来を選んできた」

イロドリ「それは感謝します。ありがとう。けど、どうしようもないことって、あるじゃない？ それをどう受け止めるかは私次第なわけだし。あ、この場合の私は、今の私ね。今の私？ ややこしいな。昔の私、つまりはあなたがどう受け止めるかってこと。未来は変わらないよ。私に起こっていることはあなたには止められない。むしろ、あなたが私を選び続けたら、必ず起こる」

キキトリ「何が起こるの？」

イロドリ「何が起こっても、私は不幸だとは思ってないよ」

キキトリ「何が起こるの!？」

イロドリ「何が起こるのは別にそんなに問題じゃない」

キキトリ「教えて!」

イロドリ「（ものすごい笑顔で）・・・聞いても、私を選んでくれる？」

ノイズ。

イロドリ、未来に起こることをキキトリに伝える。しかし、ノイズのため、イロドリの声は聞こえない。

キキトリ、愕然とする。

やがて、イロドリ、去る。

そこへヒトリが現れる。

キキトリ「・・・私はあなたを選べよかったの？」

ヒトリ「でも私は私を選ばなかった」

キキトリ「私はあなたを選べよかったの？」

ヒトリ「良くない私を選ばなかった」

キキトリ「私はあなたを選べよかったの？」

ヒトリ「悪い未来に行きたくはないよね」

キキトリ「私はあなたを選べよかったの？」

ヒトリ「良い未来の先がずっといいなんて限らないものね」

キキトリ「ねえ、私は――」

ヒトリ「じゃあ、私を選べばいい」

キキトリ「え？」

ノイズ。

ウケトリ（母）登場。

ウケトリ「おかえり」

キキトリ「・・・え？」

ウケトリ「なに？ どうしたの？ 顔色悪いわよ？ ご飯食べれそう？ 揚げ物だけど、大丈夫？」

キキトリ「（ウケトリの顔をじつと見つめて）・・・」

ウケトリ「何、どうしたの？ 何かあった？」

キキトリ「・・・食べない」

ウケトリ「わかった。寝てなさい。おかゆでも作るから」

キキトリ「うん」

ウケトリ「そういえば、」

キキトリ「ん？」

ウケトリ「蓮、咲いてた？」

キキトリ「・・・咲きそうだったよ」

ウケトリ「もうすぐ夏休みだもんね」

ウケトリ、去る。

キキトリ、一人になる。

ラジオの音が聞こえる。

放送局 「どうもこんばんは！

レインボーフューチャー、ナナイロミライのお時間です。

今日もリスナーの君に素敵な未来からのメッセージがたくさん届いているよ！」

ヒトリ 「(イロドリのように笑顔で) 昔の私へ。

残念ながら、第一志望は落ちちゃいました。やっぱりとんかつ食べておけばよかったかな。そんなの関係ないか。努力不足です。ごめんね。あと、高校を卒業してから、田中君と別れました。浮気って言うか、他に好きな人が出来たらから。別に未練なんかありません。新しい彼氏もすぐにできました。私モテるんだよ？いいでしょ？ けど、いい男なんてなかなかなくて長続きしません」

ヒトリの言葉に、キキトリの言葉が重なる。

ヒト✕キキ「ひよつとしたら、私は一人で生きていくのかもしれませんが。子供は好きじゃないから、別に家族が欲しいとも思わないし。今、仕事がすごく楽しいです。私の今の仕事、聞きたい？ それはね——」

キキトリ「なんで」

ヒトリ「・・・え？」

キキトリ「なんで、そんなに楽しそうなの？」

ヒトリ「選んだからだだよ？」

キキトリ「前はそんなじゃなかった」

ヒトリ「違う。それはあなたが欲しい未来を望んだから。あの時のあなたに私の未来はいらなかったから。」

私は変わらない。私の未来は変わらない。私は一人で生きていく。孤独じゃない。寂しくなんかない。これは私の未来で、あなたの未来。幸せな未来に見えた未来

を、選ばなかったあなたの未来」

キキトリ 「一人になるの？」

ヒトリ 「そう、でも、大丈夫。あなたの少し前に、私がいるよ」

キキトリ 「一人は、幸せ？」

ヒトリ 「少なくとも、あなたが選んだ未来はそうでしょう？」

イロドリ、登場。

イロドリ 「ねえ、私の未来はどこに行ったの？」

ヒトリ 「あなたの未来はどこにもないよ」

イロドリ 「子供はどこ？」

ヒトリ 「子供なんか、本当は好きじゃないくせに」

キキトリ 「私の未来・・・」

イロドリ、キキトリをにらみつける。

イロドリ 「私、言ったよね？ 私を選んでくれるって、言ったよね？なのに、なんで？」

キキトリ 「だって、それは——」

イロドリ 「あなたが私を選ばないと、私の未来がなくなっちゃう。私の未来を返してよ！」

イロドリ、キキトリにつかみかかる。

しかし、それをヒトリが止め、イロドリ、倒れる。

イロドリ、倒れたままで。

イロドリ 「一度は選んだ未来をなんで捨てたの？ あなたの未来は私だったのに。なんでそんなことできるの？ 何度でも何度でも、私を選びなさいよ。大学に合格して、

田中君と結婚して、子供を産んで、育てて、私はあなたの未来なのに——！」

ヒトリ 「未来だった。今は違う」

キキトリ 「今？」

ヒトリ 「そう、今は、私。私は、私」

キキトリ 「私の未来には何があるの？」

ヒトリ 「いろんなことがあるよ」

キキトリ 「怖いことも？」

ヒトリ 「うん」

キキトリ 「嫌なことも？」

ヒトリ 「うん」

キキトリ「そんなの――」

ヒトリ「何言ってるの？ 全部、あるに決まってるじゃん。教えてあげる、私の未来に起こること」

ノイズ。

ヒトリ、キキトリに何事かを伝える。

キキトリ、愕然として、座り込む。

ヒトリ「大丈夫だよ。ずっと私がそばにいる。大丈夫。一人だから、一人の方が強く生きられる。誰に裏切られることもない」

キキトリ「・・・ばなかったら」

ヒトリ「え？」

キキトリ「選ばなかったら、どうなるの？」

ヒトリ「選ばなかったら、他の未来があなたになるだけ」

放送局「どうもこんばんは！

レインボーフューチャー、ナナイロミライのお時間です。

今日もリスナーの君に素敵未来からのメッセージがたくさん届いているよ！」
未来の私たち「昔の私へ」

多くの未来の声。

恨み言、妬み事、怒り、嘆き、幸せな声、楽しい笑い声、様々な声があふれる。

キキトリ、その未来を受け入れられず、耳をふさぐ。

やがて、静寂。

キキトリ一人である。

しばしの静寂。

ポンっと、音がする。

ウケトリ、登場。

ウケトリ「（外を見ながら）あ、咲いた。ねえ、咲いたよ」

キキトリ「・・・」

ウケトリ「かわいいピンクだね」

キキトリ「・・・あなたも」

ウケトリ「ん？」

キキトリ「あなたも私の未来なの？」

ウケトリ「（それには答えず）花ってさ、咲くよね」

キキトリ「・・・」

ウケトリ「種が根を張って、芽が出て、育って茎が伸びて葉が大きくなってさ」

キキトリ「・・・」

ウケトリ「蕾が膨らんで、咲くよね」

キキトリ「・・・」

ウケトリ「きつと、馬鹿なんじゃないかな」

キキトリ「馬鹿？」

ウケトリ「そうそう、きつと、何にも考えていないんだよ」

キキトリ「馬鹿なのに咲くの？」

ウケトリ「あ、偏見。馬鹿でも咲くよ。考えていないから」

キキトリ「・・・」

ウケトリ「私はどこに植えられたのだろう、とか、どんな場所で咲くんだろう、とか、そんなこと考えもしない。花は育ったら咲くんだよ。蕾になったら、もう、咲くことしか残ってないから、うん、きつと、思いのほか楽しいんじゃないかな」

キキトリ「ひどい場所に咲いたらどうするの？」

ウケトリ「そんなの咲かないとわかんないじゃん。選べないんだし」

キキトリ「未来は選ぶものじゃないの？」

ウケトリ「未来を選ぶんじゃない。今を、選ぶんだよ」

ウケトリ、キキトリに便箋を渡す。

キキトリ「なに？」

ウケトリ「未来の私に向かって、なんか書きなよ。いつも勝手に言ってくるばかりでムカつくじゃん。こちとら今を生きるので精いっぱいだったのに」

キキトリ「あなたは・・・？」

ウケトリ「（おちゃらけて）蓮の花の妖精ってのはダメか。ははは。

あゝゝゝ、恥ずかしいな。えつと・・・」

ウケトリ、何かを考えて、

ウケトリ「馬鹿で、育って咲くことしか考えていない、私。

（キキトリを指さし）私は、私だよ」

溶暗。

やがて沈黙。

ラジオ番組が流れる。

※暗闇の中、音声のみ。

放送局 「さて、今夜も聞いてくれてありがとう！

番組の最後はこのコーナーで締めさせてくれ。

タイムカプセルメッセージ。リスナーのみんなから届いた、未来の君に向けてのメッセージを読んでいくよ。最初のメッセージは――」

キキトリ 「未来の私へ。

私は、どんな人になっていますか？ なりたかったものになれましたか？

隣にはどんな人がいますか？ その人のことを大切に思っていますか？

家族はいますか？ 友達は何？ お父さんやお母さんは元気ですか？

私はいつかあなたになるかもしれません。でも、ならないかもしれません。

今の私が未来の私にならなかったら、私は悲しいんでしょうか？

今、私が望んでいる姿があなたなのかどうか私にはわかりません。

私があなたを選ばなかったら、あなたは怒りますか？

でも、今こうして未来のあなたにメッセージを残している私もきっと私自身の

未来で、じゃあ、私は昔の私にとってなりたい私だったんでしょうか？

・・・わかりません。きつとわからなくて、昔も、今も、未来も、どの私だって、

どんな私になりましたか？ かなんてきつとわからないんだと思います。

だから私は今を生きていきます。

いつやってくるのかわからない未来の出来事よりも、今日一日の天気を考えること、今日一日、どうやって生きていくのかを考える方が、大切だと思うんです。

だから、未来の私へ、私はきつとあなたにはならないと思います。

でも、あなたが望んだ私でなかったとしても、それはやっぱり、今の私から続いている私だから、きつと姉妹みたいなものなんだと思います。

髪が長かったり、メイクの仕方が違ったり、いつも食べる納豆の銘柄が違ったり、そんな違いで、でもそんな違いがきつと大きな違いだったりして。だから、未来になって私が悩むようなことがあれば、少しだけ叱ったり、少しだけ励ましてくれるだけでいいんです。だって、あなたはきつと私のそばにいてくれるはずだから」

明転。

キキトリが立っている。

周囲には誰もいない。

キキトリ、手にラジオを持っている。

キキトリ「選ばなかった未来の私へ。

今朝、蓮の花が咲きました。

ポンって音を立てて咲きました。

家の前の池の緑の葉っぱの中にピンクの大きな花が、咲きました。

咲いたんですよ。

・・・未来の私へ。

私はここにいます。

私は今、

確かにここに、

いるんです」

キキトリ、少し微笑む。

終